

水産科学の分野で活躍する女性たち 43

Dynamic Women@Fisheries Science 43

女の装備

村岡敬子

国立研究開発法人 土木研究所

KEIKO MURAOKA

Public Works Research Institute, Minamihara, Tsukuba,

Ibaraki 305-8516, Japan

足を一步踏み出したとき、「しまった!」と思った。男性メンバー3人と共に雨上がりの濁った川に入り、川幅の三分の一くらい渡ったところだった。陸地から見れば浅く見えたその瀬を、他の3人は、腰下あたりまで水につかりながらも、ぐんぐん渡っていく。しかし、私は身動きが取れない。流れが速いだけでなく、川底の砂が予想以上に動いていたのだ。私の足元の砂がどんどんなくなり、まるで蟻地獄に落ちた蟻がごとく、体が沈み込んでいく。声は届かず、3人は遠くなる。ライフジャケットを車に置き忘れた自分を攻めた。胸元まで水が迫り、自分の体が一瞬浮き上がったとき、下流の激流を眺めながら“死”を意識した。その時、頭の中に静寂が訪れた。見上げた空は青く、鷺が二羽、大きな弧を描きながら飛んでいた。

その後、3人に助けてもらい、こうして土木研究所の研究室で原稿を書いている自分がいます。私は、ここで土木職として魚道や環境調査法の研究をテーマに、砂防区域・ダムサイトを含む河川全域を対象に、日本各地で調査をしています。これまでの30年を振り返れば、現地調査の際は概ね、紅一点に殿方達。鈍くさく小柄な私は、迷惑をかけまいと思うものの、現場では男の人について行くのが精一杯な毎日です。そうした中で、ちょっとした油断や慢心で、前述のようなヒヤリハットが起きてしまいます。冒頭の例ではきわめて初歩的なミスが三つもありました。①ライフジャケットを忘れ、②濁った川を深さも確かめずに進み、③早めに撤収の判断をしなかった。

馬鹿をさらけ出すようですが、現場でのヒヤリハットを考え始めると、走馬灯のごとく、次々といろいろな場面がよみがえってきます。「土蜂の巣を壊してしまい、蜂に襲われる」、「河原まで下りた(滑り降りた)ものの、戻ることができない」、「猿の群れに遭遇し、睨み合い」、「ボートを使った調査中にモーターが停止して川下り」…。「野帳つけをしている手の甲が日焼けのために赤く腫れあがったこと」や、「樹上から落ちてきたマダニに寄生? され顔を三針縫う羽目になったこと」もありました。気を付けても防ぎきれないこともあります。多くの場合は危険を回避するための装備や心構えを怠っていたのでは、と自戒していま

す。体格・体力双方の面で、男性陣より劣る女だからこそ、より高い意識が必要だと思うのです。

最近、「深さを確かめながら進む」ために、膝より深い流れに入る際は“バカ〇〇君”との商品名を付けられた小型測量用品を使うようにしています。伸ばせば3mになるこの尺は、現地計測用だけでなく、水深を測り安全を確認しながら前進できるとともに、足場が悪いときには杖代わりにもなります。川底の泥が舞い上がり、川底が見えなくなることもあるので、澄んだ川でも携行します。バカ呼ばわりされる商品ながら、頼もしい助っ人です。また、熱射病対策・虫よけ・マダニ対策を兼ねて愛用しているのは、農作業用の帽子と手差し(手の甲まで覆う腕カバー)です。日よけ効果が大きいだけでなく、頭や指先の動きを妨げないため作業もスムーズです。何よりも安価で、農協の売店で入手できます。

いろいろな装備の中で、一貫してこだわっている点は、“現場にいて目立つ色”です。帽子、ヘルメット、防寒着、ライフジャケットなど、外側の装備はなるべく赤を選びます。私の好きな某野球チームのチームカラーということもありますが、最大の理由は、現場の同行者にとって、私がどこにいるかを認識しやすいからです(赤=私)。事故発生時はもちろんですが、小柄ゆえに、ちょっとした藪中ですら自分の居場所を見失い、皆とはぐれてしまう危険があるからです。さらに、派手な服装をしている方が、調査現場をしている時に、地域の方に怪しまれにくく、仕事がスムーズになるようにも感じています。ちなみに、黄色はお勧めしません。虫が集まってきます。

そして、一番大切な装備は、自分自身だと思うのです。自己認知に基づく冷静な判断と体調管理。平日からの体力づくり。私自身、たいした努力をしているわけではありませんが、年を重ねながらもなるべく長く現場に入り、この目で見ながら、研究を進めていきたいと思っています。

蛇足ですが、“目立つ服装”は、海外出張時にも大いに活躍します。私は、ここ10年くらい、国際会議に参加する際は和装で出かけます。きっかけは、「女人の海外旅行には、防犯対策として目立つ服装が効果的」との一文を目にしたことでした。さて、和装姿で研究発表をしたところ、ランチやティータイムの際に、“あの研究だけど…”，といろいろな人に声をかけられました。その後の学会でも覚えていてくれる人がおり、過去の発表内容も含めて議論が可能となりました。研究絡みでなくとも、着物を題材に話しかけやすくなるようです。和装のおかげで、いろいろなネットワーク形成と情報収集が可能となりました。シャイな日本人にとって、こんな強力なツールはありません。これは、男女問わず、皆様に広くお勧めいたします。